

縦糸と横糸

イーシャ・サーデサイによる再話

ニヨルの足元の大地は柔らかく乾燥していて、赤味がかかったオレンジ色でした。見ればそれなりに、この地表は素晴らしく、魅惑的でさえありました。あらゆる岩や小石が点在し、それぞれが、異なる形や色や大きさをしていました。あらゆる動物や昆虫が、大地の中を住まいとしていました。この大地に、質感、広がり、何かずっと下の深くて現実的なものに根付く物語を与える植物もありました。

けれども、ニヨルはいつも、空の方にもっと興味がありました。彼女のマインドは上空の空想的な領域に知らぬ間に引き込まれていくのに、何の言い訳も必要ありませんでした。確かに、彼女が住むアメリカ南西部では、空は驚異的だったのです。日没には、それは紫色とオレンジ色になり、まるで夢のようでした。

ニヨルは、彼女の家族の住む家の外に座って、夕方の空に流れて行く雲を眺めていました。彼女はそれらの雲に、ウサギ、鳥、ハート、ハチなどさまざまな形を見つけました。

彼女が指でそれらの形をなぞり始めた時、それほど遠くはない所から何か音が聞こえました。パカ、パカ、パカ、パカ。彼女の目は素早く下を向きました。

彼女の前に現れたのは、1頭のロバでした。それは、土の道をゆっくり歩いていました。パカ、パカ、パカ、パカ。ロバは大きな羊毛の束を背負っていました。

「あれは私のお父さんの仕事場に行くに違いないわ」と、ニヨルは思いました。彼女の父親は織工で、羊毛がひとたび糸に紡がれると、それを手織り機で布地にするのです。ニヨルは再び、雲を見上げました。

パカ、パカ。また、その音がしました。ただし今度は、道にもっとたくさんのひづめの音がしているように聞こえました。ニヨルがちらりと見ると、確かに、もう1頭のロバがいました。実際には——彼女が目を細めて遠くを見ると——3頭のロバがいました。いいえ、ちょっと待って、4頭！ いや、5頭？

それどころか、ロバは1頭ずつ列を成して、大量の羊毛をその背中にくくり付け、次から次へと道をやって来ました。それを見て、ニヨルは少し心配になってきました。この全部の羊毛を、彼女の父親はどうするのでしょうか。一体、それはどこに行くのでしょうか。どうやって、全部を素早く布にするのでしょうか。彼女の父親には、たった1台の織り機しかありません。誰が縦糸と横糸にするのでしょうか。

空は暗くなってきました。そして、ニヨルのまぶたは重たくなり始めました。「誰が縦糸にするの？」彼女は自分に聞きました。「誰が横糸にするの？」

縦糸、横糸…その言葉は、彼女のマインドのどこか遠い奥底で巡っていました。縦糸、横糸…やがて間もなく、ニヨルは眠ってしまいました。

彼女の目の前の渦——光景が変わりました。今、ニヨルは夢を見ていました。夢の中で、彼女は、ぼんやりした形の群れが遠くからやって来るのを見ました。彼女の方に来るに従って、はっきりと見えてきました。それらは毛むくじゃらに見えました。脚が4本ありました。それぞれの上に何か大きな塊が乗っていました。「大変！ ロバ！」ニヨルは息をのみました。

ニヨルの目がパッと開きました。彼女は鋭く息を吸い込みました。頭上にあるのは星と静かな夜の空だけであることが分かった時に、やっと彼女は息を吐きました。ああ。彼女は上半身を起こして座り、まばたきしました。

そしてそれから——彼女はもう一度まばたきしました。目をこすると、彼女の前に何がいるのかをじっと見ました。「まさか」。彼女は思いました。「そんなことがあるはずがない！」そこには再び、ロバがいました。2頭、4頭、6頭のロバが、何か変わった動物の隊列のように行進していました。彼らが歩を進めるたびに、背負われた羊毛が上下に動いていました。

ニヨルのマインドに、さまざまな疑問が一気によみがえりました。「誰が縦糸にするの？ 誰が横糸にするの？」「何てたくさんの羊毛だろう！」彼女は、自分にささやきました。「本当に、たくさんの羊毛…」

ロバに対する思いと羊毛の映像が彼女の頭脳を圧倒し、ニヨルは地面にまた滑り落ちました。気づかぬうちに、彼女は夢の国に戻っていました。そして再び、そこにはロバがいました。ただ——今度は何百頭もいるようです。そして、それらがニヨルのつぶやきを再開しました。「誰が縦糸にするの？ 誰が横糸にするの？」

ニヨルは再び目を覚まし、前かがみに座り込んだところで、気づきました。「まさか、うそでしょう！」新たなロバの隊列が道を歩いていました。彼女は震え始めました。手のひらは汗ばんできました。「私はちょっと具合が悪いんだわ」と、彼女は思いました。彼女が手を額に当てると、少しほてっていました。「私、熱があるんだわ！」と、彼女は思いました。

再び疑問が頭をもたげました。「誰が縦糸と横糸にするの？」夜が明けた時、彼女はその問いを小声でつぶやきました。

ちょうど戸口の内側にいたニヨルの父親は、たまたま通り掛かって彼女の声を聞きました。

「ニヨル」と、彼は外に出て声を掛けました。「何を言っているんだい？」

「誰が縦糸にするの？ 誰が横糸にするの？」

ニヨルの父親は心配して彼女を見ました。

『誰が縦糸と横糸にするの？』とはどういう意味だい？」

そして彼はロバたちを見ました。

「ああ」と、彼は言いました。「娘よ、心配することではないんだよ。私はこの羊毛を布地に織るんだよ」

ニヨルは聞こうとはしません。「こんなにもたくさんの羊毛！」と、彼女は叫びました。「誰が縦糸にするの？ 誰が横糸にするの？」

父親はもう一度説明しようとしたのですが、同じでした。そこで、彼は彼女の気を紛らわそうと、最近地面から芽生えた草花を指し示しました。それも無駄でした。ニヨルは取りつかれたようでした。「誰が縦糸にするの？ 誰が横糸にするの？」

とうとう、ニヨルの父親はお手上げだと両手を上げ、助けを求めに行きました。彼は近くに住んでいる賢い男を知っていました。その男はいつも不可解な問題の解決策を見つけます。恐らく、彼なら娘に何をしたらいいのか分かるでしょう。

父親が賢い男を連れて家に戻ってきた時、ニヨルはまだ玄関前に座っていました。彼女はほとんどささやくように言っていました。「誰が縦糸にするの？ 誰が横糸にするの？」

その男は彼女のそばに膝をつきました。「どうしたの？」と、彼は優しく尋ねました。

「羊毛よ！」と、ニヨルは狂気じみた目でまくし立てました。「とつてもたくさんの羊毛よ！ 誰が縦糸と横糸にするというの？」

「ああ、そうだね」と、男は言いました。「羊毛だね」

「あなたはそのことを知っているの？」 ニヨルが尋ねました。

「ええ、ええ、もちろん私は知っているよ」と、男は言いました。彼は一息ついて、そして突然口調を変えました。より深刻な調子になったのです。「でも、あなたはあのことを聞いたの？」

「何を？」と、ニヨルは言いました。

その男は深く息を吸いました。彼は頭を左右に振りました。「いいかい」と、彼は言いました。「羊毛はすべてあなたのお父さんの仕事場に運ばれた。でもその後…火事があったのだ」

ニヨルの父親はそれを聞いてびっくりしました。火事のことなど知りません！ 彼は慌てて口を開こうとしましたが、その賢い男が手で制しました。

「そう」と、男はニヨルをまだ見詰めながら言いました。「あなたのお父さんの仕事場で火事があった。でも心配しないでいい。仕事場は無事だ。でも、あなたが見た羊毛はすべて——ロバの背中にくり付けられていた束はすべて——完全になくなってしまった。もう羊毛はない」

「もう羊毛はない？」と、ニヨルは驚いてつぶやきました。

「もう羊毛はない」と、賢い男が言いました。

ニヨルはほほ笑み、彼女の瞳は明るくなりました。彼女は笑い始めました。

「もう羊毛はない！」彼女は歓声を上げました。

そしてニヨルは跳び上がって踊り始めました。ぐるぐるぐるぐる回りました。両手を差し出し、頭を空に傾けて。彼女の足は辛うじて大地に触れていました。

